

授業者による学習評価の論理

—— 大津和子の実践「世界の貿易」の分析から ——

井 上 奈 穂

(キーワード：体験 授業者 学習評価)

I. はじめに

本稿の目的は、“優れた”実践を分析し、学習評価の論理を明らかにすることである。

“優れた”実践とは何か。これは、これまで多くの教科で議論されてきた問いである。しかしながら、これらの議論では、“優れた”実践そのものではなく、むしろ、それらの前提となる授業観の是非に焦点があてられていた。この傾向は、その本質に関する考え方が統一できていない¹⁾社会系教科で特に顕著であったといえよう。では、“優れた”実践において、授業者はどのように学習者に対峙し、その学習を評価しているのだろうか。

以上の問題意識を踏まえ、本稿では、「体験」を通した社会認識形成の保障がなされているという点で“優れた”実践とされている大津和子氏による実践「世界の貿易」²⁾を取り上げ、そこに見られる学習評価の論理を分析する。この実践を取り上げる理由の1つは、「貿易ゲーム」を取り入れている点である。「製品」の生産・売買を通して、現実の社会に見られる豊かな国とそうでない国の立場を体験させる「貿易ゲーム」は、実践の蓄積も多い³⁾ため、効果的に生徒の体験を保障できるからである。取り上げる理由の2つ目は、大津氏の実践では、単なる体験にとどまらず、社会認識形成までもねらった授業構成となっている点である。

従来、実践「世界の貿易」については、取り上げられたゲームに焦点が当てられ、ゲームを通した体験とその後の学習の関係は明らかにされていなかった。この実践における学習評価の論理を明らかにすることにより、学習者の体験を確かな社会認識につなげるための手立てを明らかにすることができるのではないかと。

大津氏の実践は、いくつかの授業記録が残されており、実践の具体と授業者による学習評価の論理の抽出が可能である。そこで、まず、大津氏の実践における学習評価の論理を明らかにし、学習評価の手立てを示す。次に、その手立てを踏まえ、実施した実践（高校2年生実施）からその検証を行う。

II. 授業実践「世界の貿易」の分析

1. 概要

授業実践「世界の貿易」では次の目標が設定されている⁴⁾。

- 発展途上国の輸出する一次産品の交易条件が先進工業国の輸出する工業製品に比べて劣るため、発展途上諸国が現存の国際経済秩序の変更を要求していることを理解できる。(知識理解)
- 統計資料（グラフ・図表）から、必要な情報を読み取ることができる。(技能習得)
- 身近な食品や生活用品などを通じて、発展途上国の人々と私たちとのつながりに関心を持ち、経済格差を少しでも是正するために消費者として何ができるかを考えようとする。(態度変容)

この目標を達成するために、「問題の把握」「問題の追究」「解決への模索」の3つの異なる学習活動が組まれている。まず、第1段階では、シミュレーション教材「貿易ゲーム」を取り入れている。このゲームは、イギリスのNGO団体クリスチャン・エイドにより1982年に出版された開発教育教材の1つであり、現在では、企業研修や総合的な学習の時間などで多様な活用がなされている。このゲームは材料（原料）や道具（技術）を不平等に与えられたグループの間でできるだけ多くの富を築くことを競うものである。単純な設定ではあるが、貿易によって、豊かな国（先進国）がより豊かになり、経済格差を拡大することが実感でき、また、ゲームの中で経験する苛立ちや無力感、あるいは優越感などの感情を通じて、発展途上国の立場を共感的に理解することができ

る⁵⁾。第2段階では、商品作物である「コーヒー」を巡る貿易を事例として、豊かな国、発展途上国の貿易の現状について理解する場面となっている。最後に第3段階では、発展途上国の生産者と私たち消費者のつながりを認識し、これまでにない新しい貿易の在り方を模索する場面となっている。

表1. 授業実践「世界の貿易」の単元構成

時	段階	主な発問・よびかけ	学習活動	資料
1	問題の把握 ①貿易ゲーム	貿易ゲームをしよう。 どのような行動をとったか どのような感想を持ったか	貿易ゲームをする。 ミニレポートを書く。	
2	問題の追及 ②コーヒーと トラクター	貿易額はどのように推移しているか、なぜか コーヒー輸出国の貿易の特徴は？どのような不都合があるか。 コーヒー国際価格はどのように推移してきたか、なぜか。	資料を読み取る。 資料を読み取る。 資料を読み取る。	グラフ 図表 グラフ
3	解決への模索 ③アフリカフェ	コーヒー生産者の生活向上により役立つ貿易のしかたは？	図表をヒントに考える。	図表

(大津和子『国際理解教育—地球市民を育てる授業と構想—』国土社, 1992, p. 62より抜粋)

2. 学習評価の分析

(1) 学習評価を捉える枠組み

本稿では、学習評価を「授業者が主体となって学習成果を見取る行為」と定義する。この定義を前提とした評価方略の位置づけを示したものが、表2である。表2では、横に授業者による学習者の捉えを設定し、縦に授業者による学習成果の捉えを設定した⁶⁾。「I」～「IV」の段階における授業者による学習成果の見取りは以下のようになる。

表2. 授業者による学習評価の目的

学習者 学習成果	受容者	形成者
到達点	I	II
通過点	III	IV

まず、「I」「III」は、学習者を教育内容の受容者と捉える段階である。そのうち、「I」は受容した教育内容と授業者の設定した教育内容との齟齬を見取ることが目的となり、「III」は授業者の設定した教育内容を最低限獲得しているか否かを見取ることが目的となる。次に、「II」「IV」は、学習者を教育内容の形成者と捉える。そのうち、「II」は形成した教育内容が授業者の設定した到達点に達したか否かを見取ることが目的となり、

「IV」は授業者の設定した通過点に達したか否かを見取ることが目的となる。表2に示した4つの学習評価の目的についての枠組みを踏まえ、実践報告の各段階に見られる大津氏の学習評価の特質を見てみよう。

(2) 授業実践に見られる学習評価の特質

第1段階では次のような叙述が見られる。

なお、授業者はゲームの展開をよく観察し、とくに取引の条件、興味深い行動や発言などを記録する。(略)各グループがどのような態度で交渉しているか、交易条件はどのようなもので、どう変化しているか、各グループでどのような作戦が立てられ、どのように達成あるいは挫折しているか、どのような同盟が結ばれているか、どのような不正が行われているか、どのような援助が行われているか、などを教師は注意深く観察しておく⁷⁾。

授業者は生徒の主体的な活動の様子の観察、記録を行い、学習者の活動を見とる。学習者の活動そのものが第1段階の教育内容であり、授業者は、観察を通して、学習者が教育内容を形成する過程に着目している。授業者は、学習者の個々の活動をゲーム全体の流れの中に位置づけるための記録を残している。これは、ゲーム終了後に「ゲーム中にどのような行動をとり、どのような感情を持ったかについて生徒たちは次のように書いた」⁸⁾と

いう記述にからも伺える。第2段階では次のような記述が見られる。

ここでは、第二次世界大戦後の世界貿易がどれくらい拡大したかを概観したのち、劣悪な交易条件が今なお発展途上国にとって大きな問題であることを、具体的なコーヒー貿易の事例から学習する。(以下、教師の発言だけを記す)⁹⁾

第2段階は、「教師の発言だけ記す」という記述に見られるように、授業者の発言のみで、学習者に説明した教育内容（コーヒー貿易を事例とした世界貿易の状況について）が示されている。つまり、第1段階で示されたような学習者の状況等についての記述は見られない。このことから、授業者が着目しているのは、学習者の獲得すべき教育内容そのものであり、その形成過程ではないことが伺える。これは第3段階でも同様であり、「第三世界ショップ」の利用という「解決策」を教育内容として教授することが授業者の目的となっているといえる。

以上の分析を踏まえ、各段階に見られる授業者・教育内容・学習者の3者の関係を、図示したものが「図1. 教育内容・授業者・学習者の関係」である。図1の左が第1段階における3者の関係、右が第2、3段階における3者の関係である。第1段階では、様々な体験を通し、それぞれの教育内容を学習者が形成していく様子を見とる。そのため、授業者はその形成過程に着目することとなる。第2、3段階では、授業者の設定した教育内容を獲得しているか否かを見とる。そのため、授業者は、教育内容の質そのものに着目することとなる。このように1つの実践の中で授業者は、2つの異なる目的で学習評価を行っていることが伺える。

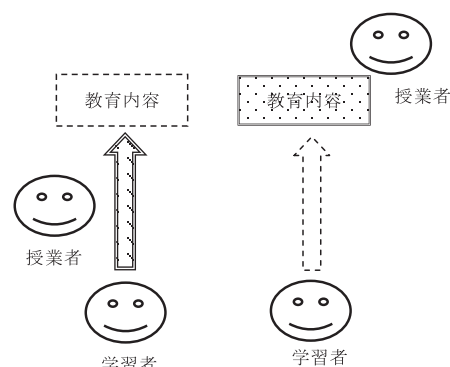


図1. 教育内容・授業者・学習者の関係

（3）過去の実践から得られる示唆

大津実践に見られる学習評価の分析から、社会系教科としての実践への示唆として以下の3点を挙げるができる。

- ・学習者が体験を通して形成した教育内容を共有する場の設定
- ・学習者の獲得した教育内容の確認・確定する場の設定
- ・場面に対応した学習評価方略の実施

このような場面設定及び学習評価を組み込むことにより、授業実践「世界の貿易」に見られるような将来の社会を担う形成者として、持続可能で豊かな社会を構築しうる資質・能力の育成が可能になるといえよう。

以下では、実践の分析から得られた3つの示唆を踏まえ、組み直した授業実践「コーヒーをめぐる世界の貿易」を示す。

Ⅲ. 授業実践の追試

1. 変更点

授業実践「コーヒーをめぐる世界の貿易」の開発にあたり、以下の点の改善を加えた。

- ・貿易ゲームの設定の変更。
- ・「コーヒーをめぐる世界の貿易」についての内容を当該年度（2010年2月実施）に合わせ、変更した。
- ・第3段階の省略。
- ・形成的な機能を持つ学習評価を実施した。

貿易ゲームは世界中、様々な場所で行われている。それは学校教育に留まらず、国際理解のためのワークショップなどでも行われている。その中で、今日的な課題に答えるものであり、かつ追試可能性が高いものとなるよう、改善が加えられている。そこで、授業実践「コーヒーをめぐる世界の貿易」では、開発教育協会と神奈川県国際交流協会より2001年に開発された『新・貿易ゲーム』の設定に準拠することとした¹⁰⁾。

次に、大津実践の行われた1990年代のコーヒーをめぐる世界貿易の問題は、生産を担う後進国（発展途上国）と消費を行う先進国の間に生じた格差であった。そのため、技術、資本は持つが資源を持たない先進国が、資源を持つが技術や資本を持たない後進国よりも有利であった。この両者に生じる経済的な格差解消のためには、生産者と消費者が直接取引を行うフェアトレードが有効であった。しかし、その後、コーヒーをめぐる世界貿易の

状況は変化し、現在では、北半球に位置づく先進国、先進国の資本が入ったことにより農業の機械化が進み、大規模経営が可能となった中進国、さらに内戦等により開発が遅れ、小規模、家族経営による農業に依存している後進国の3つの経済格差が1990年代より大きくなってきている。つまり、北半球と南半球という先進国、後進国の対立という南北問題の図式に加え、南半球の中で外資を受け入れたことにより発展した国とそうでない国の対立という南南問題が加わってきている。以上を踏まえ、生徒の獲得する教育内容として、1990年代のベトナムの参入の事例を取りあげ、南北問題及び南南問題という側面からコーヒーをめぐる世界貿易の状況を捉えさせた。さらに、第3段階の「解決への模索」を省略した。「第三世界ショップ」は現在でも有効な手立てとは言える。しかしながら、フェアトレードの基準は明確ではなく、イメージ戦略のための企業の売名行為となっているのではないかという指摘もある¹¹⁾。そのため、今回の実践ではそこまで踏み込まないこととした。

また、大津氏の実践報告から導いた学習評価の論理を具体化するための評価ツールを開発した。追試として行った実践では、この評価ツールの結果を次の学習へつなげるフィードバック過程を組み込み、形成的な機能を持つ学習評価のために活用した¹²⁾。以下、「評価ツール」の活用を中心に、追試として行った実践の実際を示す。

2. 授業実践「コーヒーをめぐる世界の貿易」の実際

(1) 展開Ⅰ

展開Ⅰは貿易ゲームを行った。貿易ゲームは、製品の作成と取引の2つに分かれる。実践では製品の製作と取引をそれぞれ2回ずつ行った。高等学校での実践であり、1時間の授業時間数を考慮し、次のような時間配分を目安とした。つまり、貿易ゲームの説明(5分)→作成①(10分)→取引①(10分)→作成②(10分)→取引(10分)→振り返りの記述(5分)である。また、貿易ゲームの設定は以下のようなものである。

1. 役割

進行役(教師)、マーケット(3名)、参加者グループ(2～3名)

A, B グループ(先進国)：封筒(鉛筆3本, ハサミ2本, 定規2本, フロッピーディスク1枚, 紙1枚, 紙幣1万円×20枚)

C, D グループ(中進国)×1：封筒(鉛筆1本, ハサミ1本, 定規1本, 紙20枚, 紙幣1万円×5枚)

E グループ(後進国)×1：封筒(鉛筆1本, 紙1枚, 紙幣1万円×1枚)

*各グループに製品の一覧を渡す

2. 以下のようなルールを説明する

- ・渡された物しか使ってはならない(自分のハサミや鉛筆, 紙などを使ってはならない)
- ・「製品」はハサミを使ってきれいに切り、決められたとおりの大きさになっていなければならない。
- ・暴力の禁止

(開発教育協会・神奈川県国際交流協会『新・貿易ゲーム—経済のグローバル化を考える—[改訂版]』特定非営利活動法人 開発教育協会, 2001の基本設定を参考に、生徒の実態を踏まえ、筆者が設定し直したものである)

生徒は「できるだけたくさんのお金を儲ける」という目的を共有し、主体的に活動することを促される。目的達成の手段はA～Eのいずれのグループに所属するかによって左右されるため、貿易ゲームを通して形成される認識は、いずれのグループに所属するかによって異なる。できるだけ多くのお金を稼ぐことが目的となれば、製品を生産するために自らの所属するグループは何が不足しており、それはどのグループが持っているのか、どうすれば、それを手に入れることができるのかについての情報をより多く持つことが必要となる。例えば、A, Bグループにとって、C, Dグループは紙を手に入れるための交渉相手であり、逆に、C, Dグループにとって、A, Bグループはハサミなど道具を手に入れるための交渉相手となる。これは、現実の場面で言えば、技術力の低い後進国から見れば、先進国はハサミに象徴される技術力を得るための交渉相手であり、また、資源の少ない先進国から見て、後進国は紙に象徴される資源を手に入れるための交渉相手であることに対応している。このようなゲームを通して生徒の感じた思い、また、行った工夫の具体が第2段階の「問題の迫及」へとつながる。大津が実践の中で見取っていたこの部分を、次頁に示す<振り返りシート1>を用いて見取った。問1は「ゲームに勝つためにどのような工夫をしましたか?」と問い、実際のゲームの中で行っていた工夫を記述させた。また、問2は「次回、ゲームをしたら、どのような工夫をしますか?」と問い、次回の対策としての工夫を記述させた。問3は「ゲーム中にどのようなことを感じましたか?」という問いを通して、ゲームを通して感じたことや考えたことを示させた。展開Ⅰの終結で実施された<振り返りシート1>の記述は、項目ごとに整理し、展開Ⅱの導入の際、展開Ⅰとのつながりを意識させるために用いた。

<振り返りシート1>

2年 組 番 氏名
問1. ゲームに勝つためにどのような工夫をしましたか？
問2. 次回、ゲームをするとしたら、どのような工夫をしますか？
問3. ゲーム中にどのようなことを感じましたか？

(2) 展開Ⅱ

展開Ⅱでは、コーヒーをめぐる貿易の状況の教授が目的となる。展開Ⅱの授業は以下のように進めた。

表3. 展開Ⅱの実際

	発問・学習活動	教授内容
導 入	○前回の貿易ゲームを思い出そう。 ・どんなことを感じましたか？ ・封筒には何が入っていましたか？ ・前回のゲームは世界貿易の様子を反映したものです。封筒の中身は世界の貿易における何を表していますか？	<振り返りシート1>の確認 ハサミ、ものさしなど ハサミ、ものさし、鉛筆＝技術(機械)、紙＝資本(物)、紙幣＝資本(お金)
展 開	○コーヒーをめぐる貿易を見てみよう。 ・コーヒーの生産国と消費国を見てどのようなことが分かりますか？ ◎なぜ、生産国と消費国が異なるのか？ ○生産量の多い国々を見ていこう。 ・生産量の多い国々ではコーヒーはどれくらい飲まれているのでしょうか？ ・それはなぜでしょうか？ ・アフリカ諸国とベトナム・ブラジルの生産量の違いはなぜ生じるのだろうか？ ○消費量の多い国を見ていこう。 ・これらの国々ではどのようにコーヒーが売られているのだろうか？ ・どこで加工しているのだろうか？ ○生豆と加工した製品の価格差はどれくらいあるのだろうか？ ◎なぜ、生産国と輸入国が異なるのだろうか？	コーヒーの生産国は赤道付近に多い(コーヒーベルト)。アメリカ、ドイツ、日本が多い。 (予想) 気候が合わないから？ アメリカ、ドイツ、日本ほど飲まれていない。 これらの国で作られたコーヒーのほとんどは輸出され、外貨を稼ぐために用いられている。 ベトナム・ブラジルでは機械化が進み、大量生産が行われている。一方、アフリカ諸国では家族単位による小規模な生産となっているから。 焙煎した豆、粉、インスタント、缶コーヒーなど加工された状態で売られている。 生豆で輸入し、自国で加工している。 インスタントコーヒーの場合、生豆の約16倍になる。 生産国にとってコーヒーは外貨を稼ぐ手段となっているから。また、近年、生産国での競争が激化し、生豆の状態であれば、安価で手に入れることができる。そのため、消費国は生豆を輸入し、加工した上で販売する方が高い利益を得ることができるから。
終 結	○今日の学習内容をまとめてみよう。 ・<振り返りシート2>の実施 ・<振り返りシート2>の答え合わせ ○今日の学習内容を振り返ってみよう。 ・<振り返りシート3>の実施	(教授内容の習得を確認する) (解答の訂正、質疑)

導入部では、展開Ⅰと展開Ⅱの教育内容の関連を意識させる。そのため、<振り返りシート1>の内容をまとめたものを配布し、展開Ⅰの貿易ゲームを通した各生徒の感想を共有した。その上で、各グループの封筒の中身を確認し、それらが勝敗に与えた影響を確認した。次に「コーヒーを巡る世界の貿易」について授業を行い、アメリカ・ドイツ・日本、ベトナム・ブラジル、アフリカ諸国を事例に、資源・技術・資本の差から生じるコーヒー

貿易の状況を解説した。

以上のような展開Ⅰ、Ⅱとのつながり、展開Ⅱの教授内容の習得を確認するために、終結部では、＜振り返りシート2＞を実施した。ここで、獲得が期待される知識の構造は以下のように示すことができる。

表4. 展開Ⅰと展開Ⅱの関連

展開Ⅰ			展開Ⅱ		
封筒の中身によって格差が生じる	グループ A, B	封筒の中にハサミ, 定規など道具が2つずつ入っている。	生豆を加工する技術を持っている。	先進国	技術, 資本, 資源の偏りにより経済格差が生じる
		封筒の中に紙幣が20万円分入っている。	生豆を様々な形で加工するための条件を整えられる資本がある。		
		封筒の中に紙が1枚入っている。	生豆を生産することが難しい。		
	グループ C, D	封筒の中にハサミ, 定規など道具が1つずつ入っている。	生豆を加工する技術は十分ではないが, 大量生産する技術力がある。	中進国	
		封筒の中に紙幣が5万円分入っている。	生豆の大量生産にかかる投資ができる。		
		封筒の中に紙が20枚入っている。	生豆を大量生産しやすい。		
	グループ E	封筒の中に鉛筆しか入っていない。	生豆の加工や大量生産する技術がない。	後進国	
		封筒の中に紙幣が1万円分入っている。	技術に投資することができない。		
		封筒の中に紙が1枚入っている。	生豆の大量生産が難しい。		

表4では、左に展開Ⅰ、右に展開Ⅱの教育内容を示したものである。

展開Ⅱでは貿易ゲームでの体験を踏まえた世界の貿易の理解が求められる。そのため、展開Ⅱの導入部では、展開Ⅰでの体験とのつながりを意識させる必要がある。例えば、「封筒の中にハサミ、定規など道具が2つずつ入っている」ということが、「生豆を加工する技術がある」という状態に対応していること、また、「封筒の中に鉛筆しか入っていない」「封筒の中に紙幣が1万円分入っている」「封筒の中に紙が1枚入っている」ということが、「アフリカ諸国」の状態と対応しているというように、展開Ⅰと展開Ⅱの対応関係を把握することである。これらを確認するための評価ツールが以下の＜振り返りシート2＞である。

問1では、「貿易ゲーム」で用いた紙幣、紙、はさみ、鉛筆、ものさしが現実の世界貿易における「資源」「資本」「技術」の何を象徴したものなのかを想起させる問題で、紙幣は資本、紙は資源、はさみ・鉛筆・ものさしは技術となる。これらの想起ができるということは、展開ⅠとⅡの対応関係を把握していることを意味する。

問2は、展開Ⅱで取り上げた国の中から典型例として、アフリカ諸国、ブラジル、日本を取り上げ、資源、資本、技術の3つの側面で見たとときの差異を○、△、×で記入させる問題となっている。後進国の典型例として取り上げたアフリカ諸国は、コーヒーベルト上にあるという意味では、資源に恵まれているがそれを生かすための資本、技術が不十分である。そのため、資源は○、資本、技術は×とした。中進国の典型例として取り上げたブラジルは、大量生産が行われているものの、その多くは外資や経済政策に依存したものである。そのため、資源は○、資本は×、技術は△とした。最後に先進国の典型例として取り上げた日本は、コーヒーベルト上にないためコーヒーの生産が不可能である。そのため、資源は×とした。しかし、多くのコーヒーを輸入し、加工販売しているため、技術と資本は○とした。＜振り返りシート2＞を実施した後、答え合わせを行い、授業者の想定と

<振り返りシート2>

2年 組 番 氏名			
確認プリント後期 No. 14 貿易ゲーム② (p. 84-89)			
問1. 「貿易ゲーム」では、A~Eまでのグループに渡された袋の中身（紙幣、紙、はさみ、鉛筆、ものさし）に違いがありました。それらは、現実の世界貿易における「資源」、「資本」、「技術」を象徴しています。これらが何を象徴していたのか、解答欄に記入しなさい。			
紙幣)	紙)	はさみ)	
鉛筆)	ものさし)		
問2. 今回の授業では、コーヒーを事例に世界の貿易について考えました。以下の表1は、今回登場した国(アフリカ諸国, ブラジル, 日本)の差異をまとめたものです。それぞれの国は、「資源」、「資本」、「技術」という面から見たとき、何が不足し、何が整っていますか? 十分にあるものには○, ほどほどにあるものには△, ほとんどないものには×をつけ、以下の表を完成させなさい。			
表. コーヒーをめぐる「資源」、「資本」、「技術」の差異			
	資源	資本	技術
アフリカ諸国			
ブラジル			
日本			

個々の生徒の解答とのずれを確認し、なぜ、そうなるのかについて展開部を踏まえながら、授業者と生徒の間の認識のずれを修正した。その後、<振り返りシート3>を実施した。<振り返りシート3>では、後進国の典型として取り上げたアフリカ諸国、中進国の典型として取り上げたベトナム、ブラジル、そして、先進国の典型として取り上げたアメリカ、ドイツ、日本の3つの立場を提示し、それぞれの国の立場に立って、「コーヒーとは何か」を記述させるものである。これまでの学習と<振り返りシート1><振り返りシート2>を通して、世界の貿易が構造的に不平等である点を理解している生徒に、それぞれの国にとっての「コーヒー」の意味を記述させることを通して、各国にとって「コーヒー」はどのような意味を持つのかを考えさせ、授業の終了とした。

<振り返りシート3>

2年 組 番 氏名	
確認プリント後期 No. 15 貿易ゲーム③ (p. 84-89)	
問. コーヒーを巡り、大きく3パターンの貿易への関わり方の在り方を学習してきました。それぞれの国にとってのコーヒーとはどのようなものでしょうか? <u>それぞれの国の立場に立って</u> 回答欄に記入してください。(「特になし」、「分からない」はNGです。)	
アフリカ諸国	私たちにとって、コーヒーとは……
ベトナム, ブラジル	私たちにとって、コーヒーとは……
アメリカ, ドイツ, 日本	私たちにとって、コーヒーとは……

(3) 生徒の反応

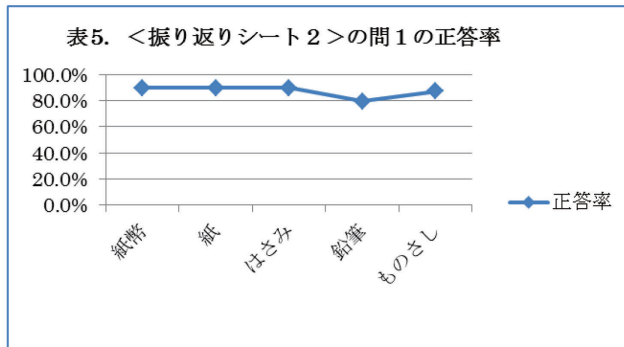
本実践で使用した<振り返りシート1>は展開ⅠとⅡをつなげるためのツール、<振り返りシート2>は生徒の学習状況の把握と確定のためのツールであり、いわゆる形成的な機能を持った学習評価であった。一方、<振

り返しシート 3」は、本実践における総括的な機能を持った学習評価であった。これらの学習評価の機能が十分に果たされているか否かを生徒の反応から検証する。

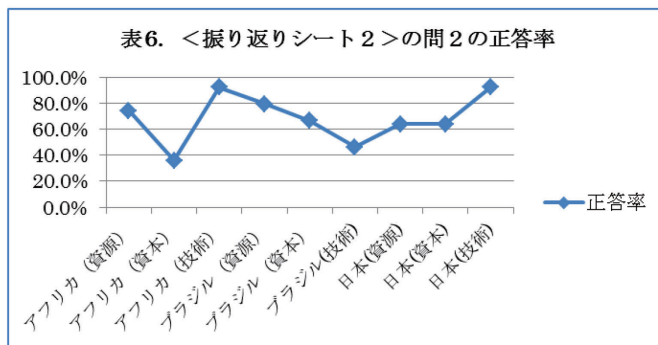
なお、本実践は2010年3月に高校2年生の第2学年の2クラスで実施した。授業構成及び使用したツール等は同一のものを使用した。全体の傾向を示すためにここでは2クラス39名を一つの集団とした結果を提示する。

- (a) 授業者の意図した教育内容の獲得状況（学習評価Ⅳ）…＜振り返りシート 2＞
 (b) 実践を通して形成された教育内容（学習評価Ⅰ）…＜振り返りシート 3＞

(a) 授業者の意図した教育内容の獲得状況



(縦軸に%を示し、横軸には、項目を記載した)



(縦軸に%を示し、横軸には項目を記載。また、「アフリカ諸国」は「アフリカ」、「ブラジル、ベトナム」は「ブラジル」、「アメリカ、ドイツ、日本」は「日本」と略した)

のであった。最も正答率の低い「アフリカ諸国の資本」では、○と回答した生徒が10名、△が13名、無回答が2名、正解の×を出した生徒は14名であった。＜振り返りシート 2＞の答え合わせの際、授業中の生徒とのやり取りの中で、「アフリカの資本」については、「コーヒーの生産にかかる資本」として捉えていなかったことが明らかとなった。授業では、その点を説明し、理解を促した。このように、＜振り返りシート 2＞というツールを介して、授業者の意図する教授内容の獲得の確定とそのずれの修正を図ることにより、教育内容の獲得を保障するための手立てを講じた。

(b) 実践を通して形成された教育内容

では、このような過程を経て、個々の生徒に形成された教育内容を見ていこう。本実践では、フェアトレードを世界貿易の解決策として提示しなかった。そのため、各国の立場に立った世界貿易の理解にとどまったものとなっている。この実践を終えた生徒の回答の中から代表的なものをピックアップしたものが以下の表5である。

例えば、Hのように、後進国と中進国との違いを表出していない回答も見られる。しかし、「先進国が買ってくれないと意味がない」、「輸入せんと飲めない」のように、後進国、中進国がともに、先進国に依存したコーヒー貿易を展開していることを理解していると言える。また、Eのように「生きていくために必要な商品」「お金を

表5. 形成された教育内容―それぞれの国にとってのコーヒー＜振り返りシート3＞―

	アフリカ諸国	ベトナム, ブラジル	アメリカ, ドイツ, 日本
A	生活のために作らなければならないもの	売るためのもの。生活するために作らなければならないもの。	飲むためのもの
B	生きていくための仕事でしかない	売り物だったり……	眠気覚まし
C	飲まないけれど、先進国に大量に輸出するいわば商品	ほとんど飲まないけれど、日本やアメリカなどに輸出する。大事な商売道具である。	アメリカなどの国から輸入する、飲み物
D	飲まないけど技術はあるので輸入することで国の利益を得ている	飲まないし技術もかけているけど、国の利益を得るために作っている	技術や資本はあるけど、作る資源がないため生産している国から輸入している
E	生きていくために必要な商品	お金を稼ぐための道具	ほかの国から買う飲み物
F	飲まないから必要じゃないけど、輸出すればお金になる物	飲まないから必要じゃないけど、技術をもらったし輸出すればお金になる物	作れないから飲むのに輸入するしかない
G	苦労して生産したもので、自分たちの生活（収入のために頑張っているもの）	機械のおかげでたくさん生産でき、また輸出することで利益を得るもの	おいしいもの
H	先進国が買ってくれないと意味がない	先進国が買ってくれないと意味がない	輸入せんと飲めない

(39名の中から9名をピックアップ。生徒の記述をそのまま記載している)

稼ぐための道具」「ほかの国から買う飲み物」と、各国にとってのコーヒーの位置づけを商品、道具、飲み物とし、その違いを示している。このように、自分なりの言葉で、それぞれの国の立場から「コーヒー」を意味づけることができているといえる。

本実践を受けた生徒は、日々の授業実践の中で、自らの考えをまとめたり、討論等を行っている大津氏の実践を受けた生徒と異なり、そのような機会を日々の授業の中で十分に与えられてはいない。自らの考えをまとめるなどの活動は1つの単元で行うものではなく、日々の授業実践の中で長期的に行うことが必要である。その意味では、今後、大津氏の他の実践の追試も行う必要がある。

IV. おわりに

近年、貧困や格差など、様々な社会問題が見られる。しかし、それらの問題を学校教育の中で取り上げた場合、当事者でない分、他人事となりやすい。体験的な学習は、他人事となりがちなそれらの問題に、擬似的ではあるが当事者として直面させる上で有効な学習である。しかし、一方、体験に埋没し、その意義の考察が不十分になりがちな学習でもある。そのため、体験の保障と解決のための一定の教育内容の共有が不可欠である。氏の実践はその両立が行われているからこそ、体験的な学習を意味ある学習へとつなげることができ、“優れた”実践としての評価につながったのだろう。

本稿では、氏の実践から学習評価の論理を導きだし、具体化することができた。このことは、社会系教科における体験的な学習をよりよい実践につなげる上で一定の意味を持っていると言える。

* 本稿は、平成23年度科学研究費補助金若手研究（B）課題番号：23700974による研究成果の一部である。

注（引用文献等）

- 1) 棚橋健治『社会科の授業診断―よい授業に潜む危うさ研究―』明治図書、2007年、p. 22。
- 2) 実践「世界の貿易」については、大津の以下の論文、著書を参考とした。
大津和子『国際理解教育―地球市民を育てる授業と構想―』国土社、1992年、pp. 61－77。
- 3) 「貿易ゲーム」を取り入れた実践としては以下が挙げられる。

菊田兼一「「貿易ゲーム」とそれをもとにした四時間の近現代史」『歴史地理教育』9月号, 2001年, pp. 54-57。

猪瀬武則「中学校社会科公民的分野における実践的意思決定能力育成—「貿易ゲーム」実践を事例として—」弘前大学教育学部研究紀要クロスロード第7号, 2003年, p. 9-17。

4) 大津, 1992年, p. 61。

5) 大津, 1992年, p. 61。

本稿では, 大津氏に倣い, 後進国を「発展途上国」と表記する。

6) 以下の論文における「学習評価」の定義を参考とした。

井上奈穂「社会科における評価方略」社会認識教育学会編『新社会科教育学ハンドブック』明治図書, 2012年, pp. 273-280。

7) 大津, 1992年, p. 61。

8) 大津, 1992年, p. 64。

9) 大津, 1992年, p. 66。

10) 開発教育協会・神奈川県国際交流協会『新・貿易ゲーム—経済のグローバル化を考えるが— [改訂版]』特定非営利活動法人 開発教育協会, 2001年。

11) この点については以下の文献に詳しい。

小澤卓也『コーヒーのグローバル・ヒストリー—赤いダイヤか, 黒い悪魔か—』ミネルヴァ書房, 2010年。

長坂寿久編『日本のフェアトレード—世界を変える希望の貿易—』明石書店, 2008年。

オルター・トレード・ジャパン／パラグラフ「クォーターリー [あっと]」3号, 株式会社 光邦, 2006年。

オックスファム・インターナショナル (日本フェアトレード委員会訳)『コーヒー危機—作られる貧困—』筑波書房, 2003年。

12) 形成的な機能を持つ学習評価については, 以下の文献を参考とした。

橋本重治原著・(財)応用教育研究所改編『教育評価法概説』図書文化, 2003年。

The Logic of Learning Assessments in Social Studies Lessons :

An Analysis of “*The World Trade*” Practice of Kazuko Otsu

INOUE Naho

What is the “good” practice? The long-pending issue remains unsolved even now. However, it was focused on the right or wrong about the sense of lesson instead of the “good” practice itself. This trend was especially remarkable with the social studies. So, we should clear up the question ‘how did the teacher assess students’ learning in the “good” lesson?’

This study explains one of the logic of learning assessments in social studies lessons. First, I analyze the famous practice of “the World Trade” and describe the teaching methods of Kazuko Otsu, a renowned practitioner of social studies in Japan. Second, I present the teaching materials that I developed for verifying the applicability of the analyzed teaching method and introduced to the social studies lesson. Finally, I explain methods to use teaching materials as well as to create them.

The results are the following :

- (1) Set the lesson scene describing and appreciating students’ experiences.
- (2) Set the lesson scene evaluating students’ acquired knowledge.
- (3) Determine the learning assessment appropriate to the lesson scene.